



暮らしの中から、
純粹理性批判



karinomaki

わからないことが多すぎ

この世の中は、わからないことであふれています。その中で、自分にできることだけをごんばっていくしかなく、あれこれに手を出すと、よく失敗します。

カントの、超越論的演繹

演繹という言葉があります。これを、カントは「カテゴリー」という、人間の頭の中の枠組み（整理する機能）を厳密に吟味するという意味で使っているのです。しかし、そこに、「超越論的」という言葉がつきます。この言葉は、「先験的」とも訳されるのですが、大まかに、「根源」と考えることにします。

すると、面白いことに気がついてくるのです。

私達の日常生活のことです。

できないことは、しない、わからないことは、しない。

ものぐさな私は、基本的に、手っ取り早く自分ができることしかしません。パソコンをするようになって、いやというほど、できないことはできないことを思い知りました。でも、できることは、何が何でもやりたい。好きだから。それは、とても、カント哲学の「超越論的演繹」に似ているのです。

カテゴリー

私達は、日々、わからないことの中で、わかることを探して生きています。これが、演繹なのです。演繹とは、筋が通っている理屈を探して枝葉末節を取り払うことですが、これができないと、カテゴリー（思考）はまとまらないのです。

表紙画像

私は、この本をつくる前、なんとか表紙画像を自分が撮った写真にしようと奮闘していました。でも、写真は、どうしても縦が横に回転してうつってしまいます。しまいにあきらめました。そして、不思議なことに気がついたのです。

私は今まで、表紙画像には何も手を加えませんでした。これはこの文章に必要でしたのだと。

これが、純粹統覚です。

純粹統覚とは、数学や物理学の根源です。ここから、神の摂理へと、「ア・プリオリな総合判断」が伸びています。カントが、「覚知」や、「表象」という言葉を組み立てててしたかったことは、ア・プリオリな総合判断という、神の技への道なのですが、純粹統覚が、もともと人が神の域に向かうように仕向けられた、斜め右方向への線だと考えるとどうでしょうか。

斜め右方向

私は、神は真っ直ぐ上にあると思い、カントも誰もがそうです。しかし、人には、斜め右方向しか目指せません。だからこそ、人は生きているのが楽しく、気持ち悪く、苦痛なのです。

なぜなら、真っ直ぐ進んでいるはずが、神の力で曲げられてしまうからなのです。

これに抗うことなく、地盤を固め、上を目指すことを批判しつつ、天上へのあこがれを書いたのが、純粹理性批判なのです。

もう一度、超越論的演繹

世の中は、わからないことだらけです。それなら、カントやモーツァルトのように、できることを精いっぱいすればいいでしょう。

その中で、超越論的演繹が成されています。わかりたい、全てをカテゴリー（思考の枠組み）の中に入れたい、しかし、無理・・・そのあがきの中で、カテゴリーの浄化である、超越論的演繹が成されます。

もちろん、私達は真っ直ぐであると思いたいのです。自分こそ正しいと。でも、どう頑張っても、人間は斜め右しか目指せないのです。

だから、超越論的演繹があるのですね。カントはいちばんここを書くのが楽しかったような気がします。ゆがんだ進路を真っ直ぐに変えようとする最大の努力、超越論的演繹についてが・・・。